



## 「次代への胎動」

株式会社カルティバイト

代表取締役 開(比嘉) 梨香

「キラキラと目が輝き、弾けるような笑顔になる。」我々青少年交流に携わる者が勢いづく瞬間だ。それからの子どもたちの成長は早い。海綿が水を吸収するようにどんどん変化していく。様々な体験や交流を経て、彼らが作り上げる世界は我々大人の胸を打つ。

沖縄にはその極みともいえる事業がある。『アジアユース人材育成プログラム (AYDPO)』。2009年に内閣府の直轄事業『アジア青年の家 (AYEPO)』として始まり、その後、国が創設した『万国津梁人材育成基金』を活用して沖縄県主催で継続している国際交流事業である。アジア14カ国から各々2名が沖縄の地に集い、本土14名、地元14名の高校生とともに、3週間にわたって寝食を共にしながら、「環境問題」について学び、交流し、20年後のビジョンを作り上げるといふものだ。国内には多様な国際的交流事業があるが、アジア15カ国の高校生が一同に集結すること、3週間もの合宿であること、参加高校生の学びを大学生チューターがサポートし、それを大人のファシリテーターが指導するという多重構造で人材を育成していること、閉会式までの道のりが綿密にデザインされつつも、参加生やチューターの主体性・自発性を重視する学習プログラムであること、途中で民泊することなどが、他に類をみない特徴だ。しか

も「全員が家族」になる。だからこそ、政策研究大学院大学教授の黒川清氏やNHK解説委員の室山哲也氏など、国際的に活躍されている講師陣がスケジュールをやりくりして、毎年喜んで参加して下さっているのだと思う。

我が社は5年間続けて学習プログラムを受託させていただいているが、3週間で、人種・言語・宗教・社会環境・経済環境、そして個性が違う高校生たちが、ふれあい・ぶつかり・汗をかきながら創り上げる世界は、我々大人の圧倒するほどになる。一人ひとりの伸びしろの大きさには唖るしかない。

子どもたちが共に体験・交流すると、涙の別れは付き物だ。ところが、3週間もいっしょに生活し、英語で講義を聴き、英語でディスカッションするとなると訳が違う。内容が理解できない落ち込み、言葉が通じない苛立ち、意見の衝突、わがままの噴出、ホームシックなど、たくさんの壁が次々にやって来る。これらを乗り越えるなかで生まれる参加者の絆は半端なものではない。だからこそ、環境や価値観が全く違う国々に住む高校生が共に作り上げたビジョンを発表する閉会式は、我々大人の胸を打つのだ。

彼らを学習面・精神面でサポートする大学生チューターは、海外留学生6名と県内大学生が6名。海外組は、立命館アジア太平洋大

学から応募して来る100名余の中から選出され、県内組の倍率も4〜5倍になる。過去のチューター経験者の多くは、プログラム修了証を就活に活かし、めざす企業に採用された。また、高校生参加者の多数は、その後、意欲的に留学や国連プログラムなどにチャレンジし、海外では起業家も現れた。

それだけではない。7年間の参加高校生451名(うち県内高校生100名)、大学生のべ96名ものAYDPO・AYEPOファミリーは、事業終了後も交流が続いている。その感動が忘れられない高校生は大学生チューターとして事業に帰って来ている。きっと彼らは、将来の沖縄・日本のリーダーになつてくれるに違いない。外交官や政府高官の子弟が多い海外からの参加生は、20年、30年後には各国のリーダーになることが期待される。沖縄を軸にアジアのビジネスネットワークが繋がっていくという未来も現実味を帯び、21世紀ビジョンを具現化するひとつの道が見え始めた。

今年は、万国津梁人材育成基金の最終年度。『アジアユース人材育成プログラム』も最後の年となる。すでに各国から今年のプログラムへの問い合わせが来ているという。アジア各国で認知され、期待されてきた証拠ではないだろうか。次代への胎動は始まった。終わらせてはもったいない。事業継続の道が開かれることを切に願う。